

注) 本作品データは「縦書き」「ルビあり」等での表示を前提に制作されています。ご覧になる端末、機種の設定を確認、調整の上でお読みください。

今でもはつきりと覚えている。

十二歳の夏。

花火大会の夜。

夜店通りの電球の連なりと、屋台のにぎわい。

そこから香る煙や甘い匂いに、人々の熱気と高揚が混じる。

その喧騒を逃れ、歩いて十分。着いた先は俺たちが通う中学校。

壊れたフェンスから忍び込み、誰もいないグラウンドに立った時は、今この瞬間、世界にいるのは俺と君だけみたいに思えた。

グラウンドの端はしに置かれた演説台。

いつもは校長や体育教師が立つそこに、浴衣姿の君はちよこんと座った。

楽しみだね。

そうやって星空を見上げる。きつとここからなら花火がよく見える。特等席だ。

下駄を履いた両足をぶらぶらさせる君。花びら柄の鼻緒がかわいいの、と笑う。

その横顔を覗き見ながら、花火が上がるのを待っていた。他愛もないおしゃべりとスズムシの声。

もしも……。

ほてる頬を夜風で冷ましながら思う。

もしも今ここで、君に好きだと言ったら……。

不安なんて胸の奥に押し込め、都合のいい未来を妄想してしまう。

それはあまりに甘美で、まぶしくて……。しだいに鼓動が高鳴っていく。君に聞こえて
しまいそうだ。

でも聞こえてもいい。

緊張してることに気づかれたっていい。

そんな俺を不思議に思った君が、もし小首を傾げて見つめてきたら、俺はとっさに告白
してしまいそうだ。

どうかした？ と、君が言った。

しばらく無言だった俺を怪訝に思ったのかもしれない。

夜風に髪をそよがせながら、君は小首を傾げて俺を見つめた。

ドキッとした。息を呑んだ。その息を押しつけて、衝動がわき上がった。

君の瞳を見つめ返したまま。

君のことが――。

夜空に花火が咲いた。

咲いた花は、まだ散るな。

願いながら、祈りながら、俺は待った。

君が答えてくれるのを。

不安を胸の奥に押し込め、都合のいい未来を妄想しながら――。

後輩の女子生徒に、放課後音楽準備室に呼び出され、

「先輩」と、うるんだ目を向けられたら、なにを想像する？

告白、恋のはじまり、青春の一ページのなあれとかこれとか？

けれどあいにく俺は、予想も想像も妄想も嫌いだ。大っ嫌いだ。そんなものは自分に都合な願望や思い込み、偏見が大部分で、ヘタに影響を受けたら、たいてい失敗する。勝手に思い描いた期待なんて、必ず裏切られるものだ。

そんな不合理に一喜一憂し、振り回されるなんてバカだろ？

てなわけで、ひたすら自分の目で見ただことを信じ、その場その場で判断し、適切な行動をとることが俺のモットーだ。

だから、

「先輩」と、後輩女子にうるんだ目を向けられても、俺は妄想や期待のひとつかけらも持ち合わせていなかった。

「なんの用だ？　こんなところに呼び出して」

音楽準備室は、校舎東棟の二階の一番端にある。窓外のけやきの大木のせいで日当たりが悪く、昼間でも薄暗い。しかも今は夕暮れ時。照明も点いていない。俺と後輩のふたりだけ。遠くから吹奏楽部の演奏が聞こえ、それがかえってものさびしい。

うつむいた女子生徒の名は、たしか小池橋こいけはしだったか。俺のクラスメイトの友人の友人の妹だとか。すれ違ったことくらいはあるかもしれないが、ほぼ初対面だ。

そんな生徒が俺になんの用だ？

想像はせずに、小池橋が口を開くのを待った。待ちながら、じつは先程から小池橋の背後が気になってしかたない。

ちらちら、ちらちら、鬱陶しい。ゆらゆら、ゆらゆら、うごめいている。猫じやらしを鼻先で動かされた猫のように、さつきから目が引き寄せられ、そわそわ、そわそわ、どうにもこうにも落ち着かない。

「わたし……わたし……」

小池橋が要件を言うより先に、その肩越しから覗いてるものに、俺がもう辛抱できなくなった。

目障りだ！

右腕に力を込め、小池橋に絶対に当てないよう注意しつつも、拳を思いっきり突き出した。

狙いは、小池橋の背後で揺らめいていた赤黒い塊だ。かろうじて人型に見えるが、あちこちがくつついたり離れたりしていて定まらない。凹凸もなく全身がのっぺりしていて、ときおり赤黒い溶岩色の蒸気らしきものを放っている。

粘土のような感触のそれは、触れた瞬間冷たさがしみこんできて気持ち悪い。何度体験しても慣れない。正直関わりたくないのだが、目の前で動かれると目障りだから、とりあえず殴ることにしている。

赤黒い塊は吹っ飛び、開いていた窓から落ちていった。

「え？ ……せ、先輩？ なにを？」

小池橋の顔が強張っている。そりやそうだろう。いきなり自分のすぐそばの空間目掛けて、全力右ストレートを繰り出すヤツなんて怖すぎる。通報レベルだ。

「なんでもねえ。気にするな」

とぼけて口笛を吹いてみた。トトロのテーマソング。和んでもらおうと思ったが、小池橋は、なぜかハツとした。

「祓ってくれたんですね！ 悪霊を！」

興奮気味に詰め寄ってくる小池橋に、俺は冷静に応じた。

「いや、俺は、その……なんだか〃ヤなモノ〃がうざくてな。だから殴ってみた。それだけ。悪霊だとか、祓っただとかは、ホント知らねえ」

しかし小池橋はうんうんとうなずき、感極まった様子だ。

「ずっと寒気がして、肩が重くて、毎晩うなされて、鏡を見たときとか気味の悪い気配を感じたりしてたんです。ああ、そう、耳元で不気味な音が聞こえたこともあって」

身体を震わせる小池橋。